

「ふつう」の多数決

福岡県 福岡県立嘉穂高等学校附属中学校 1年

児嶋 杏奈（こじま あんな）

「ふつう」って何だろうと、小さいときから思うことが多かった。誰かにとっての「ふつう」は他の人から見れば「異常」で、「ふつう」かどうかなんて、「ふつう」だと思う人の数と「異常」だと思う人の数を比べて、どちらが多いかで決まっているようなものだ。一般的な意見なんてものは、所詮は多数決で、だから、物事の本質ではないはずなのに。

女子は女子らしく、男子は男子らしく。これが「ふつう」なら、「私が私らしく」あることがなぜ「ふつう」ではなくなるのだろう。

スカートをはいて、「私」という一人称を使うのが「女子らしい」のなら、普段はズボンをはいて、日常的な会話で「僕」という一人称を使う私は、一般的な意見——あくまで多数決だが——では、「ふつう」ではないのだろう。そんな私が、今日は「表現の自由」と「ふつう」について考える。

学校の制服は、女子用で、もちろんスカートだ。あまり嬉しいことではない、できれば男子の着ている制服が着たいが、私の戸籍の性別は女で、仕方のないことだと思う。でも、私が「僕」とつかうと、たいていの場合、疑問に思われる。「え、何で」

仲の良い人はそのことを認めてくれている。でも、あまり関わりのないクラスメイトの躊躇のない質問は、些細なことかもしれないが、何度も続くと、だんだんきつくなっていく。

「ボクっ娘なんだね」

中途半端な知識から、無理矢理カテゴライズする人もいた。だんだん、自分が分離していくような気がした。そんなとき、作文を書くときに「私」と書くことにも違和感を覚えるようになった。本当に、これは自分の考えていることなのだろうか。悩みに悩んだ末、私が最も信頼する方に相談することにした。

私の相談をその方は真面目に聞いてくれて、「作文や、先生に対するときの『私』は敬語だと考えれば良い」「最終的に社会人になったら性別に関係なく『私』と使うから」「変だという人とはあまり関わらなければいい」という風に、アドバイスしてくれた。「私」が敬語だという考え方は、今までの私にはないもので、言葉の一つ一つが、励ましとなった。

私は、できることなら男子になりたいけれど、それを学校で言うのは、あまりにリスクが大きい。イジメられるかもしれないし、不必要に優しくされるかもし

れない。実際は、この作文を書いていることすらも、かなり危険なことだと思う。けれど、人間は一人一人同じようにはできていないのだから、言葉にしないと、私の「ふつう」とあなたの「ふつう」が違っているということすらも分からない。分かっていないことが分からない限り、分かるには絶対出来ない。だから、私は今、この作文を書いている。

LGBTQの方々にとっての「ふつう」は他の人から見れば「異常」かもしれない。でも、それはLGBTQだからという訳ではなくて、人間の一人ひとりの思考回路が違うから起こることなのだと思う。だから、同じ家族でも、同じ学校の人でも、いくら気が合う人でも、一から十まで全部、まるっきり同じということはない。みんな違ってみんな良いかは別として、みんな違うのである。

もし、あなたがみんなと違うからという理由で、「ふつう」ではないからという理由で、イジメられているとすれば、それはイジメている人の「ふつう」があなたの「ふつう」と違っただけである。だから、自分はおかしいのだと悩まなくていい。他のところへ行けば、あなたが「ふつう」で彼らが「ふつう」ではないかもしれない。「ふつう」はただの多数決である。

自分を表現することは自由で、それは基本的人権の一つだ。表現の自由は権利なのだから、それでもしイジメられるのなら、確実にイジメた方が悪いのである。自分達が「ふつう」だと思っている人は用心した方が良いかもしれない。せっかく表現の自由があるのだから、自分の「ふつう」と誰かの「ふつう」の違うところを見つけるために、自分の「ふつう」を表現してみたら良いと思う。

私も公の場ながら、最後に一つ言わせてもらいたい。

僕はこのままの僕でありたい。